

幼児期における運動発達と情動発達の関連性に関する研究

本郷 一夫*
大 瀨 守 正**
松 本 恵 美***
小 玉 純 子****

本研究は、幼児期における運動発達と情動発達の関連性を明らかにすることを目的とした。保育所の5歳児62名を対象に、運動調整課題として、“タッピング・ゲーム”と“ボトルゲット・ゲーム”を実施した。また、保育士、保護者には、幼児の情動発達と運動発達に関して、子ども一人一人について評定を依頼した。その結果、幼児期の運動発達(コーディネーション課題)と情動発達(保育士評定)とは関連していることが示された。しかし、保育士と保護者の評定は、運動発達については一致するものの、情動発達については一致しないことが示された。これらのことから、幼児期では、情動調整能力と運動調整能力を同時に発達させていくことが重要な課題であることが示唆された。また、子どもの感情発達に関するアセスメント方法の開発が必要であることも示唆された。

キーワード：幼児、運動調整、情動調整、情動発達

【問題と目的】

近年、障害の確定診断はなされていないものの、「集団活動にうまく参加できない」「保育者の指示に従わない」「子ども同士の関係がうまく形成できない」などの特徴をもつ子どもをどのように保育したらよいのかということが問題になってきている。いわゆる、「気になる」子どもの保育の問題である。このような子どもの保育に当たっては、まず、「気になる」子どもの発達的特徴を知ることが重要であると考えられる。

一般に、「気になる」子どもの行動特徴としては、①対人的トラブル、②落ち着きのなさ、③順応性の低さ、④ルール違反、⑤衝動性の5つがあげられている(本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島, 2003; 本郷, 2010)。これに関連して、平澤・藤原・山根(2005)は、調査の結果、保育者が「気になる・困っている行動」として多く挙げているのは、集団や対人関係に関する問題であったと報告している。また、古市(2009)は、保育所における「特別な支援が必要な子」の行動特徴について調査した結果、

*教育学研究科 教授
**教育学研究科 博士課程後期
***教育学研究科 博士課程後期
****教育学研究科 博士課程前期

知的障害を持たない群の行動特徴として「ルール違反・対人トラブル」を挙げている。いわゆる、社会・情動発達の側面での発達の問題が指摘されている。

さらに、「気になる」子どもに対する保育実践に関する研究においても、「自分の思い通りにならないことがあるとカッとなって暴れてしまう」「ちょっとしたことがきっかけで気持ちが崩れて立ち直れない」(野村, 2007), 「思い通りにならないと途端に暴言を吐いたり, 唾を吐いたりする」「他児とトラブルになると急に感情的になり, はさみを取り出し『死ね!』と突きつけるなど暴力的な言動が多い」(守・山崎・駒井, 2013) などといった情動調整の問題が指摘されている。このように, 外在化問題行動をもつ子どもは, 怒りなどの否定的な情動の抑制に困難があることが指摘されている (Eisenberg et al., 2001)。

しかし, 「気になる」子どもは, いわゆる社会・情動発達の問題だけではない。運動発達にも遅れがあることが指摘されている。本郷・飯島・平川 (2010) は, KIDS 乳幼児発達スケールを用いて, 保育所における「気になる」子どもの発達的特徴を検討した。その結果, 社会性(対成人)における遅れが最も大きいことが示された。次に, 遅れが大きかったのは, 運動領域であり, 社会性(対子ども)や言語(理解), 言語(表出)などの領域よりもむしろ遅れが大きかった。また, 頭にのせた不織布を落とさないようにコースを歩き, グループ対抗で速さを競うゲーム(「不織布リレー」)において, 「気になる」子どもは, 一人でコースを歩く「ひとり条件」では他児との違いはないが, 2人1組で行う「ペア条件」では, 他児に比べて「気になる」子どもの歩く速度は遅く, 不織布の落下回数も多いことが示された (Hongo, Iijima, & Hirakawa, 2016)。すなわち, 「ペア条件」では, 自分自身の運動調整を行うと同時に他児の運動との調整を行う必要があり, いわゆる二重課題(dual task)条件となっている。したがって, 「気になる」子どもは, このような2つの課題を同時に行うことが要求される場面において困難さを示しやすいと考えられる。しかし, それは, 二重課題そのものための困難さなのか, それとも二重課題の複雑さによるものなのか, とりわけ対人関係の調整を含む二重課題のための困難さなのかは明らかではない (本郷, 2014)。

以上のように, 「気になる」子どもの特徴として, 社会性の発達とともに運動発達と情動発達の問題が挙げられる。しかし, 幼児期の発達において, 運動発達と情動発達との関連を示した研究は必ずしも多くない。運動発達, とりわけ運動コーディネーションに代表されるような運動調整は, 調整という点では, 情動調整における調整と共通の基盤をもつとも考えられる。そのような点から, 本研究では, 幼児期における運動発達と情動発達との関連性について明らかにすることを目的とする。

【方 法】

1. 対象児：保育所の5歳児クラスの子ども62名(男児29名, 女児33名)。平均73.4か月(範囲:67.0か月～79.0か月)。

2. 調査期間：2015年11月～12月。

3. 調査課題

(1) コーディネーション課題：

① タッピング・ゲーム：ジグザグに置かれたコーンの上のカスタネットを順番に叩いて、最後の10個目のカスタネットを叩き終わるまでのタイムを競う課題である。

本課題は、スタートから最後のカスタネットを叩くまでのタイムを計測することによって、俊敏性と身体のコントロール能力を測定することを目的として設定された。

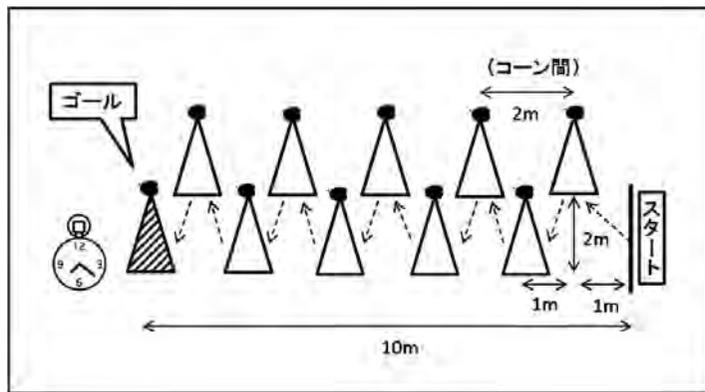


図1 タッピング・ゲーム

② ボトルゲット・ゲーム：10m先に置かれたコーンの上のペットボトルを5秒以内に取り取る課題であり、同時にスタートから5mの所で、カードに描かれた数字(2・3・4)と色(赤・青・黄)とを正確に覚えてゴールすることが求められる課題である。カードは高さ約70cmのテーブルの上に置かれ、スタート地点やゴール地点から見えないように覆いがされていた。なお、本課題は、木塚・加藤(2014)の課題を参考に構成したものである。

本課題においては、時間内にペットボトルを取ること(速さ)と、カードの数字と色を認知し記憶を保持すること(正確さ)という2つのことを同時に行う能力を測定した。「速さ」の指標としてはペットボトルを取るまでのタイムを、「正確さ」の指標としてはカードの数字と色をゴールした後に質問し正答した得点(数字1点, 色1点, 計2点満点)を測定した。

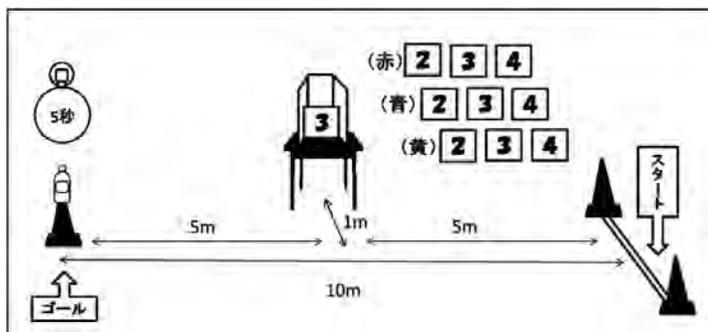


図2 ボトルゲット・ゲーム

(2) 子どもの自己評定：

①ゲームに対する自己評定：2項目（タッピング・ゲーム、ボトルゲット・ゲーム）について、上手にできたと思うかを「できなかった（1点）」から「よくできた（4点）」までの4段階で評定をしてもらった。

②運動有能感：運動について、「得意じゃない（1点）」から「とても得意（4点）」までの4段階で評定をしてもらった。

③感情調整能力：3項目（「お友達に意地悪をされて怒ったとき、『怒っている』と言葉でいえますか」など）について、「言えない（1点）」から「言える（4点）」までの4段階で評定をしてもらった。

なお本評定においては、KEEPAD JAPANのクリッカー用アプリケーション（Turning Point 2008）を用いて、各々の参加児にクリッカーの該当ボタン（1～4）を操作させて、評定をしてもらった。

(3) 保育士の評定：

①子どもの感情調整能力：5項目（「いやなことをされても気持ちをおさえて『やめて』と言える」など）について、「全くできない（1点）」から「非常にできる（10点）」までの10段階で評定をもらった。

②子どもの運動能力：1項目（「運動が得意である」）について、「全くできない（1点）」から「非常にできる（10点）」までの10段階で評定をもらった。

(4) 保護者の評定：

対象児の保護者のうち30名に対して、自分の子どもについて保育士と同じ評定をもらった（上記「保育士の評定」①子どもの感情調整能力5項目、②子どもの運動能力1項目）。

【結果】

1. コーディネーション課題

①タッピング・ゲーム

タッピング・ゲームにかかった時間に性差が見られるかについて検討を行うために、「タッピング・

ゲームの速さ」を従属変数, 性別を独立変数とする t 検定を行った。その結果, 男児の平均値の方が女児よりやや短かったが, 男児と女児との間に有意な差は見られなかった(図3)。

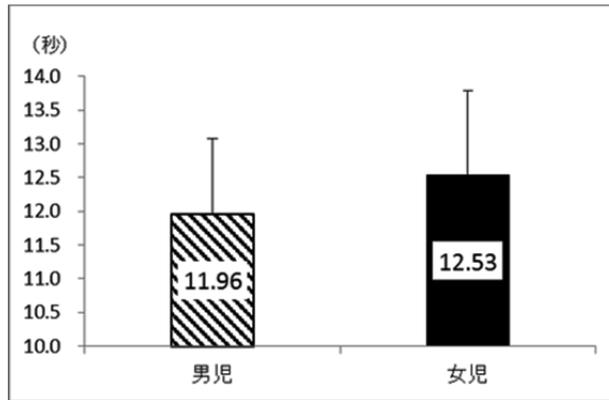


図3 タッピング・ゲームの速さ

②ボトルゲット・ゲーム

ボトルゲット・ゲームにかかった時間に性差が見られるかについて検討を行うために、「ボトルゲット・ゲームの速さ」を従属変数, 性別を独立変数とする t 検定を行った。その結果, 男児と女児との間に有意な差が認められ ($t(60) = 2.10, p < .05$), 男児の方が女児よりも速かった(図4)。次に, ボトルゲット・ゲームにおける課題回答の正確さに性差が見られるかどうかについて検討を行うために、「ボトルゲット・ゲームの正確さ」の得点を従属変数, 性別を独立変数とする t 検定を行った。その結果, 女児の方が男児よりやや成績がよかったが, 男児と女児との間に有意な差は見られなかった(図5)。

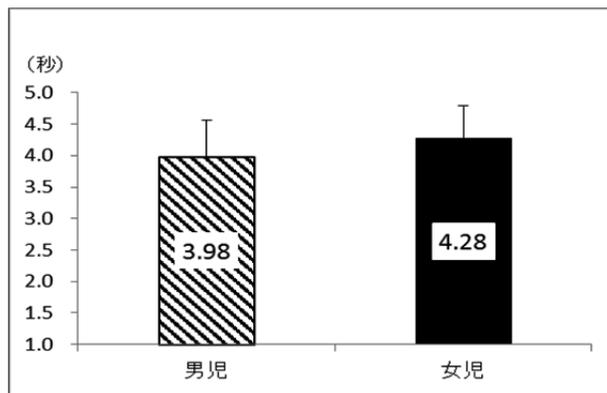


図4 ボトルゲット・ゲームの速さ

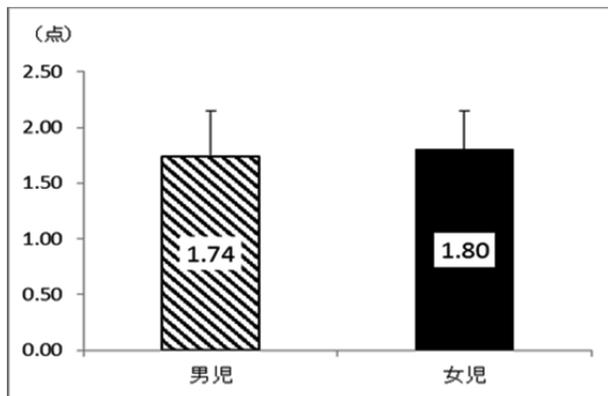


図5 ボトルゲット・ゲームの正確さ

2. 子どもの自己評定

表1にはコーディネーション課題後に行った、子どもの自己評定の平均値が示されている。ここから、コーディネーション課題に対する自己評価は全体として高かったことが分かる。感情に対する自己評価については、「E2. お友達に嫌なことをされても、たたいたりせずに『やめて』といえますか?」という質問に対する得点が最も高く、「E3. 絵本やテレビでかわいそうな話を聞くと、悲しい気持ちになりますか?」という質問に対する得点が最も低かった。

表1 子どもの自己評定平均値

項目	平均	SD
M1. タッピング・ゲーム、上手にできましたか?	3.27	0.79
M2. ボトルゲット・ゲーム、上手にできましたか?	3.55	0.76
M3. 運動は、得意ですか?	3.32	1.00
E1. お友達にいじわるをされて怒ったとき、「怒っている」と言葉で言えますか?	3.02	1.11
E2. お友達にいやなことをされても叩いたりせずに「やめて」と言えますか?	3.37	0.96
E3. 絵本やテレビでかわいそうな話を聞くと、悲しい気持ちになりますか?	2.76	1.24

* 4段階評定

3. 保育士の評定

保育士の子どもに対する評定の平均値が表2に示されている。感情に対する評価では、「N2. かわいそうな話を聞くと悲しそうにする。」という項目に対する得点が最も高く、「N5. 泣くのを人に見られないようにする。」という項目に対する得点が最も低かった。

表2 保育士の評定平均値

項目	平均	SD
N1. いやなことをされても気持ちをおさえて「やめて」と言える。	6.32	2.80
N2. かわいそうな話を聞くと悲しそうにする。	7.18	2.28
N3. 自分の失敗を見られないようにする。	6.85	2.26
N4. 鬼ごっこをしてわざとつかまりそうになってスリルを楽しむ。	6.95	3.09
N5. 泣くのを人に見られないようにする。	5.95	2.67
N6. 運動が得意である。	7.00	2.47

* 10段階評定

4. 子どもの運動発達(コーディネーション課題)と感情発達(保育士評定)との関連

子どもの運動課題の成績と子どもに対する感情についての保育士評定との相関係数を求めた。運動能力の指標には、子どもの「タッピング・ゲームの速さ」「ボトルゲット・ゲームの速さ」「ボトルゲット・ゲームの正確さ」の3つを取り上げ検討した(表3)。その結果、「N6. 運動が得意である」という保育士の評定項目は、子どもの「ボトルゲット・ゲームの速さ」($r = -.271, p < .05$)と負の相関、「ボトルゲット・ゲームの正確さ」($r = .375, p < .01$)と正の相関が見られた。また、保育士評定の「N1. いやなことをされても気持ちをおさえて『やめて』と言える」および「N5. 泣くのを人に見られないようにする。」の2項目を除き、運動課題の成績と有意な相関が見られた。とりわけ、「N3. 自分の失敗を見られないようにする。」においては、3つの運動課題すべての成績と有意な相関が示された。

表3 保育士評定と子どもの運動課題の相関

項目	タッピングゲーム の速さ	ボトルゲットゲーム	
		速さ	正確さ
N1. いやなことをされても気持ちをおさえて「やめて」と言える。	.106	.025	-.069
N2. かわいそうな話を聞くと悲しそうにする。	-.110	-.125	.330**
N3. 自分の失敗を見られないようにする。	-.279*	-.344**	.257*
N4. 鬼ごっこをしてわざとつかまりそうになってスリルを楽しむ。	-.327**	-.313*	.179
N5. 泣くのを人に見られないようにする。	-.178	-.173	.054
N6. 運動が得意である。	-.248	-.271*	.375**

** $p < .01$, * $p < .05$

5. 保育士と保護者の評定の関連

保育士評定と保護者評定の相関を求めた。その結果、子どもの運動能力に関する評定項目である「P6. 運動が得意である」においては、有意な正の相関が見られた。しかし、感情調整能力に関する残りの5項目では有意な相関は見られなかった(表4)。

表4 保育士評定と保護者評定の相関

項目	相関
N1.P1. いやなことをされても気持ちをおさえて「やめて」と言える。	.290
N2.P2. かわいそうな話を聞くと悲しそうにする。	.037
N3.P3. 自分の失敗を見られないようにする。	-.094
N4.P4. 鬼ごっこをしてわざとつかまりそうになってスリルを楽しむ。	.112
N5.P5. 泣くのを人に見られないようにする。	.194
N6.P6. 運動が得意である。	.631**

**p<.01, *p<.05

6. 子どもの運動課題（コーディネーション課題）と保護者の評定との関連

子どもの運動課題の成績と保護者評定との相関を求めた（表5）。その結果、子どもの感情調整能力を評定した「P5. かわいそうな話を聞くと悲しそうにする。」と子どもの「タッピング・ゲームの速さ」との間 ($r = -.497, p < .05$) においてのみ負の相関が見られた。

表5 保育士評定と子どもの運動課題の相関

項目	タッピングゲームの速さ	ボトルゲットゲーム	
		速さ	正確さ
N1. いやなことをされても気持ちをおさえて「やめて」と言える。	-.164	-.354	.200
N2. かわいそうな話を聞くと悲しそうにする。	-.063	-.344	.468*
N3. 自分の失敗を見られないようにする。	-.340	-.408*	.238
N4. 鬼ごっこをしてわざとつかまりそうになってスリルを楽しむ。	-.263	-.394	.254
N5. 泣くのを人に見られないようにする。	-.357	-.305	.191
N6. 運動が得意である。	-.322	-.296	.201

**p<.01, *p<.05

【考察】

1. 運動発達と感情調整能力の特徴

本研究は、幼児期における運動発達と情動発達の関連性を明らかにすることを目的とした。

(1) 運動発達について：子どもの運動発達の指標としては、1つには俊敏性と身体コントロールの能力を測定する課題である「タッピング・ゲームの速さ」を用いた。また、もう1つは、2つの課題を同時に行う能力を測定する二重課題 (dual task) として「ボトルゲット・ゲームの速さ」と「ボトルゲット・ゲームの正確さ」を用いた。

それぞれの運動課題の成績の男女差について分析してみると、タッピング・ゲームにおいては差が見られなかった。本課題は脚力のほかに身体のバランスをとる能力や左右に素早く動きを変える俊敏性を必要とするが、これらの能力を総合した運動課題においては、この年代では男女でそれほど差がないことを示していると考えられる。一方ボトルゲット・ゲームは“速く走る”という運動課題と、カードの数字と色を認知し覚えるという認知課題を同時に行う課題である。分析の結果、本課題の速さでは男女差が見られた。しかし、認知的側面である記憶の正確さにおいては男女差が

見られなかった。これらのことから、運動の発達には、発達の早さが異なる様々な運動要素や、認知的要素が含まれていることが示唆される。したがって、幼児期の子どもの運動に関する発達を評価する場合、運動発達だけではなく認知発達など他の領域の発達も考慮しながら子どもの発達を評価する必要があると考えられる。

(2) 感情発達について：保育士による子どもの感情調整能力の評定の集計結果を見てみると、平均点が一番高かったのが「かわいそうな話を聞くと悲しそうにする」という項目であった。この項目では、話の内容を理解する認知能力や、話の中の登場人物の視点に立って話の中の状況について考える“心の理論”の獲得が必要となると考えられる。また情動的側面においては共感能力の発達が問われる項目である。本項目が高い得点を挙げているということは、この年代の子どもにおける認知発達の特徴を反映していることが考えられるが、一方で保育士が子どもに期待する項目でもあると考えられる。一方、平均点が一番低かった項目は「泣くのを人に見られないようにする」であった。この項目は、“泣くこと”が“恥ずかしい事”として評価され、態度に表わされるかどうかを問うており、情動の表示規則の一つを獲得しているかを反映している。情動の表示規則は所属する文化の情動面での規制であるが、現在の日本においては一定以上の年齢になって人前で泣くことは一般的に好ましくない行為として捉えられている。本調査において、この項目が他の項目よりも比較的低かったのは、このような表示規則の獲得がこの年代ではまだ十分に達成されていないことが考えられる。

2. 子どもの運動発達と感情発達との関連について

本研究の目的は、子どもの運動発達と情動発達の関連を検討することであった。そこで、子どもの運動課題の結果と保育士による子どもの感情調整能力の評定との関連性を検討した。その結果、子どもの運動項目と保育者の評定項目との間でいくつかの相関が示された。たとえば、「ボトルゲット・ゲームの正確さ」と共感能力や情動の表出の発達を問う「かわいそうな話を聞くと悲しそうにする」という項目との間に有意な相関が見られた。「ボトルゲット・ゲームの正確さ」は運動場面における視覚的認知能力と記憶の正確さを反映しており、話の理解能力と共通した認知能力が関係しているとも考えられる。また、恥や誇りといった二次的情動の獲得やその情動に対処するための行動調整について問う「自分の失敗を見られないようにする」という項目は、「タッピング・ゲームの速さ」・「ボトルゲット・ゲームの速さ」と「ボトルゲット・ゲームの正確さ」のそれぞれとの相関が示された。これは一方では、様々な身体能力や認知能力に支えられた運動能力の発達が、恥や誇りなどの情動の発達に影響しているとも考えられる。つまり運動発達の過程での成功体験や失敗体験により恥や誇りなどの情動の発達が促され、さらに発生した情動に伴う行動を促すということである。また逆に、運動に対する恥や誇りの情動が運動への参加度に影響し、さらに運動能力の発達に影響することも考えられる。つまり情動と運動は相互に作用しながら発達していくことが考えられる。その他、運動課題と相関のあった感情発達の評定の項目として「鬼ごっこをしてわざとつかまりそうになってスリルを楽しむ」がある。鬼ごっこのなかで、鬼に捕まりそうな距離まで自ら接近して、

さらに捕まらないようにするには、自分の運動能力に対する自信と実際の運動能力が獲得されていることと関連している。相関の見られた運動項目は「タッピング・ゲームの速さ」と「ボトルゲット・ゲームの速さ」であり、脚力などの身体能力や俊敏性、身体コントロールなどの運動能力が関連していると考えられる。

以上のように、子どもの運動課題と保育士の感情発達の評定との関連が示された。ここでの感情発達の指標としては、保育士による子どもの評定結果を用いているが、子どもの運動能力評定と、運動能力および認知能力を同時に駆使する二重課題 (dual task) との関連が示されたことは、実際に日頃子どもと接している保育士が、子どもの運動能力に関して認知面を含め様々な側面を考え合わせた上で評価していることが考えられた。

3. 保育士と保護者の評定の関連について

本研究では、子どもの感情調整能力の評定について保育士に依頼したほか、一部の参加児の保護者にも協力を求め同じ評定をしてもらった。保育士の評定と保護者の評定との関連を検討した結果、子どもの運動能力に関する評定では有意な相関が示されたが、感情調整能力に関する項目では相関が示されなかった。その原因の一つとして保育士と保護者との子どもを観察する環境の差異が考えられる。保育士が子どもを観察する保育所という環境は、子どもにとって同年代の他児が集う集団場面からなる。一方、保護者が子どもを観察する家庭という環境は、年代が異なる家族の集う小集団である。ともに集団における子ども自身の役割とその役割にふさわしい行動が求められるが、その内容は異なることが考えられる。たとえば保育所においては他児と同じ行動をとることが求められることが多いが、家庭では子どもの年齢やきょうだい間での年齢の上下関係にふさわしい行動が求められる。このように保育士と保護者では子どもを観察する環境が異なり、目にする子どもの行動も異なる。また子どもの行動の意味づけや評価の基準も異なる。感情発達に関しては、このような違いが評定に影響して相関が見られなかったと考えられる。しかし身体運動の発達は、環境の違いによる影響を受けにくいとともに、保護者にとっても捉えやすい側面であるため、保育士と保護者との評定の間に有意な相関が示されたものと考えられる。

4. まとめ

以上のように、本研究では幼児期の運動発達と情動発達との関連性が示された。また、子どもの運動発達が運動に対する有能感を高め、誇りや恥といった二次的情動の発達や感情調整能力につながるものが考えられた。逆に、自分の運動能力に対する誇りや恥の感情は運動への参加態度に影響し、更には運動発達に影響することが考えられ、運動発達と情動発達が相互に影響し合っていることが考えられた。これらのことから、子どもの運動発達あるいは情動発達を促すためには両者に同時に働きかけることが重要であることが示唆された。とりわけ、「気になる」子どもの発達的特徴を理解し、保育の中で対人関係や自己を育てていくためには、遅れが認められる1つの領域の発達だけでなく、発達の機能間連関を考慮した働きかけが重要となると考えられる。最後に、本研究

では、子どもの感情発達に関して保育士の評定と保護者の評定との間であまり関連は見られなかった。このことに関して、両者が子どもを観察・評価する環境が異なることが考えられた。このことから、子どもの感情発達についてより詳細な特徴を捉えるためには、保育士と保護者に対する質問項目の検討も含め、子どもの感情発達に関するアセスメント方法の改善とアセスメント・スケールの開発が必要であることも示唆された。

【文 献】

- Eisenberg, N., Cumberland, A., Spinrad, T. L., Fabes, R. A., Shepard, S. A., Reiser, M., Murphy, B. C., Losoya, S. H., & Guthrie, I. K. (2001). The Relations of Regulation and Emotionality to Children's Externalizing and Internalizing Problem Behavior. *Child Development*, **72**, 1112-1134
- 平澤紀子・藤原義博・山根正夫。(2005)。保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究－障害群からみた該当時の実態と保育者の対応及び受けている支援から－, *発達障害研究*, **26**, 256-266.
- 本郷一夫編著(2010)。「気になる」子どもの保育と保護者支援。東京：建帛社。
- 本郷一夫。(2014)。彩られる<身体>—社会性に埋め込まれた運動協応の発達—。澤江幸則・川田学・鈴木智子(編), <身体>に関する発達支援のユニバーサルデザイン, pp.147-158, 東京：金子書房。
- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子。(2010)。「気になる」幼児の発達の遅れと偏りに関する研究。東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**, 121-133.
- Hongo, K., Iijima, N., & Hirakawa, K. (2016). Development of Motor Coordination in Young Children. *Annual Bulletin Graduate School of Education, Tohoku University*, **2**, 1-6.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子。(2003)。保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究。発達障害研究, **25**, 50-61.
- 木塚朝博・加藤謙一。(2014)。発達のなかの子どもの身体。澤江幸則・木塚朝博・中込四郎(編著), *身体性コンピテンスと未来の子どもの育ち*, pp.50-67, 東京：明石書店。
- 古市真智子。(2009)。保育者からみた特別な支援が必要な子どもの行動特徴—明らかな知的障害のない子どもについて—。中部大学現代教育学部紀要, **1**, 157-164.
- 守巧・山崎撰史・駒井美智子。(2013)。「気になる」子どもに対する保育の検討—「対象児の支援」「クラス集団作り」「保育展開の工夫」の視点から—。東京福祉大学大学院紀要, **4**, 23-31.
- 野村朋。(2007)。衝動性が高い子どもにおける自制心の形成過程—集団保育実践のあり方の検討—, *大阪健康福祉短期大学紀要*, **5**, 103-110.

The Relationship between Motor Development and Emotional Development in Young Children

Kazuo HONGO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Morimasa OBUCHI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Emi MATSUMOTO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Junko KODAMA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of the present study was to examine the relationship between motor development and emotional development in young children. Subjects were 62 five-year-old children. There were two activities in the motor development task, "Tapping Game" and "Bottle Get Game". Moreover, nursery teachers and parents were asked to fill in the questionnaire about children's motor development and emotional development.

The main results were as follows: (1) There was a significant correlation between motor development (the performances of two activities) and emotional development (the rating of nursery teachers). Especially, there was a strong correlation between the performances of motor development and the item of emotional development questionnaire (N3. He / she tries to hide his / her failure from others). (2) There was a significant correlation between the rating of the nursery teacher and the rating of the parents about motor development. However, there was no significant correlation for the rating about emotional development. It is important to develop motor development and emotional development simultaneously in childhood. In addition, it is necessary to develop the assessment for emotional development.

Key words: Young children, Motor coordination, Emotional regulation, Emotional development